

伊丹市文化財ボランティアの会 火曜会通信

第42号

発行日：平成21年8月1日

発行：伊丹市文化財ボランティアの会

発行所：伊丹市千僧1丁目1番地

伊丹市教育委員会事務局内

県大型観光キャンペーンについて

山元 龍治

「タクシー乗り場は何処?」「トイレは?」「いたみホールはどう行けばいいの?」
昨年の10月プレ・キャンペーンのスタート時にJR伊丹駅構内の観光ギャラリー
一前に座っていると、こんな問いかけばかり。10月12日(日)に実施4日目
にして漸く2名が来られた。感激。懇切丁寧な説明でお客さんは恐縮すること
しきり。結局10月はボランティア会員延べ15人が9日間対応してお見えにな
った方々は僅か9名。

11月に入って徐々に増えだして(祝日も含めて)12日間で51名をご案内。
それも日を追うごとに増えだして2ヶ月間21日で60名をご案内した。

その反省の基に、この4月からの本番に備え、県のキャンペーン推進協議会
では50ページの冊子150万部とか、市では綺麗な伊丹版チラシなど作成しJR
駅その他で配布された。

我々会員も万全を期して事前にリハーサルも実施して述べ52人で26日間対
応することにした。が4月4日初日はゼロ。天候のせいにして空しく帰途につ
いた。4月は8日間で僅か9名だったが、5月に入ると増えだし2日なんか15
名だった。この調子では準備したマイクも使えるぞーと思いきや今度は「新型イ
ンフルエンザ」の襲来。泣く子と地頭には勝てぬではないが現代は新型インフル
エンザに右往左往。やや過剰反応ぎみだが殆どのイベント、行事は中止。またま
たスタートへ逆戻り。

それでも3ヶ月間26日間(実際は24日間)キャンペーンで103名をご案内
した。殆どが市外からで、遠くは仙台からも来て頂いた。神戸、大坂をはじめ近
くの市からが大多数。市内からも僅かながらお見えになり、「長く住んでいても
知らないことばかり」と感謝された。少なくとも103名の方々は伊丹市につ
いて良い印象を持って帰られたでことしょう。ご婦人方が6割以上で極めてお
元気。まだ緑道まで案内して欲しそうな方も相当居られた。当日資料として市教

育委員会作成の「文化財散策歩道マッ
プ」とアピールプラン推進協議会作成
の「散策マップ」をお渡ししたが何れ
も好評。対応頂いた会員29名(延べ
50名)の方々、誠に有難うございま
した。



宮前まつり体験記 中村享子

「4月29日宮前祭りで紙の兜づくりがあります。誰かお手伝いを」というので親子と触れ合うチャンスなので引き受けた。

100円均一で買った折り紙で指のウォーミングアップ。かぶと・やっこさん・はかま・だましぶね・ふうせん。OK。子供に機嫌よく折らせる話し方も・・

紙のカブトといえば、子供の頃は古新聞紙で折ったものだ。最大限大きく正方形に裁断し残った紙は当日の現場で練習用に使えるだろう。NHK大河ドラマで今流行っているのは「愛」の字の直江だよ。傾向と対策を考え用具を積み、祭り当日自転車で三軒寺広場へ向かう。晴れている。口笛で吹く曲は、こいのぼり、とか、五月五日。

広場には市職員たちが紫色のおそろいのスタッフジャンパーを着て、テント、とか、テーブル4面、とか、椅子、とか、ピンク色・緑色・黄色の正方形画用紙、とか、同じ紙の3色の「愛（例のNHK大河ドラマ系）」と「ゆるキャラ、ロマンちゃん」、とか、作り方説明プリント2種類、とか、出来上がりサンプル等々を用意し現場が設定されている。隣のテントは缶バッジ系。

わが会のメンバーが全員そろったところで、あいさつとミーティング。三々五々に、お客さんが立ち寄る。第一番目に立ち寄ったのは年の頃なら30歳代男性。「甥に折ってやりたいので作り方のプリント2枚だけ下さい。画用紙は自分で用意します」とのこと。三々五々に親子連れが立ち寄る。サンプルのぶらさがったテントの軒下で画用紙を決め

た人をテーブルに引率し一緒に折り始める。私「折り方1ですか。では最初は、さんかくに折りましょう」「折り方2ですか。では最初は、ながしかくに折りましょう」-中略-親子「折り方2ですか。では最初は、ながしかくに折りましょう」-中略-親子連れの途中経過は十人十色。折る父親とそれをデジカメに撮影する母親、とか、幼い柔肌で分厚い画用紙を折りながら、ピーカン晴れで熱くなったテーブルに指をフウフウさせる少女、とか、せっかちに作業を進めて大雑把に折り目を入れる少年、とか、古風な折り方と現代風な折り方に目をそばめる老母、とか、自分が愛という名なので目印が出来てうれしいわという母親とか。私は少しアドバイスをするだけ。「両手を使って折りましょうね」「鶴の折り方は知ってる？」。

仕上がると礼儀正しい母親はこどもにあいさつを促す。こどもは私の方を見て、「ありがとう」という。無垢な子供の目は可愛く清々しいごあいさつはうれし恥ずかしい。

三々五々に親子連れが立ち寄り、用意された画用紙も飾りもなくなった。ピーカン晴れにさらされて皆さん日焼けにホタホタするし、他の催しも楽しみたい。○さん親子三代・△さん・◎さん等と猪名野神社方面に歩きはじめた。顔の広い方々なので、すれ違うたびに長年の知己とのあいさつのようなのだ。このエッセイの締めくくりはというと、幼稚園に入ったばかりの仲間の孫が人込みで迷子になったのに気づき、手分けして人の波の中を探した。その子の立ち寄りそうな金魚すくい、とか、同じ背格好の後姿のこどもを見かけて正面に回って人違いだったり。

中途半端な思いのまま、各人が自分の自転車までもどり家路についた。

ほどなくして「迷子の孫は無事に帰宅しました」とのメールをうけた◎さんから電話がはいってひと安心したところで終わる。

祭りは無事に家に帰るまでが祭りだ。



春季研修バス旅行に参加して 末次 弘幸

“生きた文化財”との出会いは、何物にも代え難い貴重な財産となった。好天に恵まれた5月12日(火)、「文化財ボランティアの会」のバス旅行に参加した。和歌山県にある国宝・重要文化財を教材とした研修の旅である。

40名を乗せたバスは午前8時に伊丹市役所前を出発。和歌山県岩出市の根来寺、紀の川市の粉河寺、和歌山市の紀州東照宮を巡り、午後6時30分に帰着した。

根来寺は1126年に覚鑿(かくばん)上人が創建した寺で、室町時代末期の最盛期には堂塔が2700あり、寺領が72万石だったという。だが、1585年に豊臣秀吉の兵火で、殆どの建物が焼失した。

この時、延焼を免れた多宝塔は高さ40メートル。日本最大の木造大塔で国宝に指定されている。新緑と青空を背景に、どっしりと構える多宝塔は、見る者をひれ伏せさせる貫禄のある建物だった。また、大伝法堂に鎮座する「大日如来」は、堂々とした仏像で、畏敬の念を感じさせた。

粉河寺は770年に領主の大伴孔子古(おおとものくじこ)が、「千手観世音菩薩」を本尊として草庵を結んだのが始まりという。鎌倉時代には七堂伽藍の隆盛を極めたが、秀吉による根来寺焼き討ちの際に、約10km離れた粉河寺も全山焼失した。現在の諸堂はいずれも江戸時代の再建である。印象的だったのは本堂である。屋根を複雑に組み合わせた八棟造りといわれる様式で、この建物を大きくかつ崇高に見せている。「西国33か所巡り」の第三番札所となっているが、33所の中では最大の本堂だという。本堂の正面に赤地の大きな提灯が2つ吊り下げられている。その側面に描かれた黒の“井桁マーク”を見やりながら、お寺の人に訊いてみた。

「このお寺は、住友家と関係があるのですか?」「全く関係ありません。井桁のマークを使い始めたのは、住友家より、こちらのほうが古いと思いますが……」

がんこ和歌山六三園での昼食後、和歌山市和歌浦に鎮座する紀州東照宮を見学した。

1621年に、紀州藩祖の徳川頼宣(家康の十男)により創建された。家康を神格化した

東照大権現と頼宣を神格化した南龍大神が祀られている。南海道を鎮護する権現造りで、「関西の日光」とも呼ばれている。大きな木々が参道に覆い被さり、緑のトンネルになっている。トンネルを過ぎると、急傾斜の階段が立ちはだかっている。「登れるものなら登ってみろ」と、言っているかのようだった。108段を登りつめると朱塗りの楼門がある。振り返ると、青い海が眼前に開けていて、絶景だった。前を見れば本殿があり、その内部は左甚五郎の彫刻や狩野探幽の襖絵で飾られていた。

国宝、重要文化財の見学・鑑賞は大いに勉強になったが、それ以上に大きな研修効果があったのは、“人間文化財、3名との出会い・触れ合い”である。三人三様のガイドぶりは、「文化財ボランティア養成講座・実践編」の生きた教材となった。

根来寺でガイドをしてくれたのは、「いわで語り部の会」のI会長。長年教師を務めた人で、神社仏閣、仏像などに関する知識が豊富。寺が誇る国宝・重要文化財を前にして、蘊蓄を傾けてくれた。文化財に関する知識水準については申し分のないガイドであり、目標にすべき人だと感じた。ただ、話したいことが山ほどあるのに、見学時間が限られていたこともあり、全員が揃わないのに、さっさと説明をしてしまう。「説明を聴きたければ、オレについて来い」とでも、言わんばかりだった。

この人を仏像になぞらえれば、右手を天に突き上げた「釈迦誕生仏」ということになろうか。そのココロは「天上天下唯我独尊」。

紀州東照宮でのガイド役は若い巫女さん。声の通りが良く、神社所有の文化財に関する知識も十分で、案内スポットへ全員を誘導し、全員が揃っていることを確認してから、説明を始める姿勢にも好感が持てた。ただ、「社殿の撮影をするな」「この中で撮影をすれば、カメラを没収する」と、何度も繰り返したのは、不快感を覚えた。

「平均年齢60歳を超える、失敗の数を数えれば両手でも足りない、分別と良識が服を着て歩いているような人間たちが相手ですぞ。1回言えば足りる。もう少し臨機応変に、相手を見て対応したほうが良い。マニュアルを基本としつつも、時折アドリブを入れるくら

いの余裕が欲しい……」

こう言ってやりたい気持ちを抑えるのに必死で、彼女の説明が頭に染みなかったのは、残念だ。マニュアル通りの対応は、時に相手を不愉快にさせる。ファミリーレストランなどで、よく経験することである。

悟りを開くために修行中の人を「菩薩」というが、この巫女さまは、もう少し修行が必要だと思われ、「ガイド菩薩」というところか。

我々に終日同行したのは、中年の女性バスガイド。旅の始めに自己紹介をしなかったのは、気になったが、その後のガイド模範演技で、最初の失点を帳消しにした感がある。説明をする相手としっかり向き合い、相手に質問を投げかけ、相手と対話をしながら、噛んで含めるように話す。各地の文化財に関する業務知識、説明能力、話術いずれもプロの水準であると感じた。

和歌山県の名産を説明するのに、ポケットからキンカンの実を取り出した。視覚に訴える粋な演出で、周到な準備、説明を分かりやすくするための創意工夫は見事だった。修行を完結し、悟りを開いた仏を「如来」と呼ぶが、この人はガイドとしての修行を積み、「ガイド道」で悟りを開いた「ガイド如来」と、言えるのではなからうか。如来の境地を目指して、今後さらに修行を続けていきたいものである。

春季研修バス旅行 宇田哲郎

天気予報の外れた絶好の旅行日和の5月12日、40名の参加者を乗せたバスは、予定通り一路和歌山に向け出発しました。車中で平素あまり経験出来ない定例会が行われた。道路交通法の改正で全員が着席したままの会議となる。池田会長の司会で各議題について担当の幹事から説明があった。車内は「声はすれども顔は見えず」覚えてた各委員の顔と声をダブらせての会議はいつもと違った「声」でした。

*根来寺

最初の訪問先根来寺では、岩手市観光協会の「いわてかたりべの会」のお迎えと説明を受けた。根来寺は覚鑿上人がこの地に神宮寺

を建て、大小神祇一千社を勧進したといわれております。「三国一のきりもみ不動尊」に始まり、天正13年(1585)秀吉の根来攻めで「大塔」・「大師堂」と「大伝法堂」の一部が焼け残った文化財について会長より説明を受けた。「大塔」に残る当時の弾痕のあとは歴史を感じた。またこの地は、春は桜、秋は紅葉の名所と言われている様だ。

*粉河寺

西国三十三ヶ所観音霊場 第三番札所として親しまれている。過去2回お参りしているが、納経所がすべてであった。今回は重要文化財の「大門」「中門」「千手堂」「本堂」等先輩の説明を聞きながら観察できた。複雑な造りの本堂、境内に今も元気に息づく大楠など新しい発見が沢山ありました。

お昼は「がんこ和歌山六三園」で各グループに分かれての食事を戴く。後グループミーティング。

*紀伊東照宮

お腹がいっぱいになった午後は、元和7年(1621)紀州初代城主徳川頼宣公が創建された紀伊東照宮の108段の急な階段のぼりでスタートした。

社殿内部の撮影を厳しく注意される巫女さんの独特な発声での説明を聞きながら、「権現造り」という桃山時代の遺風を受けた江戸初期の代表的な重要文化財である本殿には、漆塗り、極彩色の精巧な彫刻・左甚五郎の彫刻、狩野・土佐両派の絵などで荘厳された豪華さはまさに関西の日光であると納得する。

*黒潮市場

平日、午後の為か、寂しい市場であったが、和歌山の土産をそれぞれ購入したあと帰りのバスとなる。

*帰りのバスの中で

会長さんのハーモニカ独奏、酒井さんの頭の体操など楽しい車中となった。入会后2回目の研修旅行の参加でした。今回は和歌山の新緑の自然との対話、数多くの文化財、そしてその文化財を愛し守る人々との出会いがありました。そして何よりも素晴らしい出会いは40名の方と同じバスで、同じ目的で研修旅行が出来たことでした。次はどんな出会いがあるか・・・楽しみです。

市内ガイド研修の感想 新木陽子

5月のインフルエンザ騒ぎで延期されていた企画、市内研修Dコース（昆陽池スワンホール前～中野稲荷神社～鴻池神社～慈眼寺～鴻池稲荷詩碑～容住寺～天日神社）が7月の猛暑の中で行われました。

特に最終日は、梅雨もあけ本格的に夏に入ったのではないかと思うような暑さでした。しかし、新人の私たちがそんなことを言っではいけないだろう、と意を決して参加しました。



写真にある中野稲荷神社の大木（イヌマキ・クスノキ・クロガネモチ）は近所に住むおじさんが子供のころ迷子になっても目印にして家に帰ってこられたという話を聞いて大木をみあげながら、一昔前の光景に思いをはせました。神社の境内では木陰のそよ風が、ここちよかったです。きつとがんばって歩いたごほうびですね。今までは何の気にも留めなかった風景も、歴史を積み重ねて今日に至っているんだとわかると、ずいぶん深く楽しめるような気がします。

鬼の城へ 安永 繁美

アワヤ “浜田氏、おにぎりコロリンならずくパン>がコロコロと転がっていくのを追いかける。危機一髪、岩の端でピタッと止まった。鬼の城岩屋の鬼の餅つき岩での出来事。パンは岩から落ちてしまい悔しがる浜田氏だった。岩上で休憩のあと帰り際に岩の下

でパンを探し求めたがついに発見する事はできなかった。

さて、その鬼の城へ乗り込んだのは11期



の仲間。前日に資料館にて下調べも済んでいたの宿からそのまま鬼の城を制覇することになりました。

古代山城の鬼の城は標高400mの鬼城山に築かれています。古代吉備の中心地であった吉備平野が遠望できいつまでも眺めていたい気持ちにかられました。城壁は土塁が主体をなし城門4箇所・水門6箇所。角楼1箇所そして高石垣などにより構成されました。雨水などの浸食から城壁を保護するため城壁の内外に敷石が敷かれていました。この敷石は日本の古代山城では初めての発見とのこと、今は整備中で、土囊の色具合がグリーンだったので違和感はありませんでした。それでも奇岩、巨岩あり自然の浸食や、降起作用によって現在の姿を作りだしているらしい。岩の規模の壮大さや形の不思議なことが人間の力の及ぶ範囲からはるかにかかけはなれていると考え（鬼）の名をつけて呼ぶようになったといわれていますとか。

思い出の世界遺産 2) ペルーの巻

{リマ・ナスカ・クスコ・マチュピチュを巡って}
山内 富美子

南米大陸の太平洋側のほぼ真ん中に位置するペルーは、魅力あふれる世界遺産の宝庫である。首都のリマは、海岸砂漠地帯にあって、年間を通してほとんど雨が降らない。バスで走ったときも、砂ぼこりをまきあげていた記憶がある。“インカの涙”と呼ばれる霧雨が5月にほんのわずか降るだけである。

首都のリマの歴史地区として、アルマス広場を中心とした旧市街一帯が、世界遺産に登録されている。アルマス広場は、別名マヨール広場とも呼ばれ、1535年、スペインの征服者フランシスコ・ピサロが首都をクスコからリマへ移したときに、この広場を中心に町を築いていった。広場の正面には、ピサロが自らの手で礎石を置いたペルーで一番古いカテドラルがあり、リマのシンボリック的存在になっている。中央には、広場の噴水があり、待ち合わせの場所としては最適で、沢山の人々が集まっていて、写真撮影は大変だった。また、北側には、大統領府があるため警護が厳重なためか、しばしの間自由行動がゆるされ、周囲の歴史的建造物のサント・ドミンゴ教会、サン・フランシスコ教会、サン・ペドロ教会、ラ・メルセ教会、トーレ・タグレ宮殿などを巡回し、ビデオなどの映像に収める。世界遺産の集まる旧市街は、贅を尽くしたすばらしい建物が多いが、治安上の問題から、自由行動が、極端に制限されるのが、残念である。

次の世界遺産は、ナスカの地上絵で、首都のリマから444km南に行った所にある。地上絵の描かれている所は、砂漠地帯で、見学には、小型セスナ機に乗って空中から見ないとわからない程、巨大な絵が多い。私は、12人乗りのセスナ機に乗り見学をしたのだが、余りにも小さな飛行機で、最初は、「大丈夫かなあ」と心配していた。しかし、上空まで昇ると、建物などのさえぎる物も無い自然のままの下界を眺めながらの快適なフライトで、時々旋回しても恐怖を覚えることなしに、ビデオ撮影もできた。地上絵は、砂漠の地表

の黒い砂や小石を取り除いて、白っぽく明るい地肌を露出させて描かれている。線となる溝は、深さが10cmで、幅は20cmぐらいといわれているが、現地のガイドのおじさんは、35cmぐらいの幅があると説明していた。

ナスカの地上絵は、数がおよそ30個で、線と幾何学模様は、300本もあるといわれている。絵の大きさは、ほぼ10mぐらいから大きなものでは、300mにも及ぶ。絵を地面の近くで見ると、単なる車の轍(わだち)にしか見えない。だから、空中から見ないと、巨大な絵を確認することができない。ナスカの地上絵の主なものには、コンドル・ハチドリ・ペリカン・クモ・サル・オウム・手・木・三角形などがあるが、フライト中に自分の目で、しっかり確認できたのは、上記のもの以外では、半分にも満たなかったと思う。

大地という巨大なキャンバスの上に描かれた地上絵は、年間を通してほとんど雨が降らない気候のせいで、現在まで絵が残ってきたといわれている。そして、今も尚、砂漠の砂の中に埋まってしまわないように、保存のための努力がなされている。

次は、首都リマから、およそ1時間ほどで、世界遺産の町、インカの都クスコへ空路で入る。かつて、インカ帝国の首都だったクスコは、空から見ると、家の屋根がすべて赤茶けたオレンジ色をしているので、赤茶色一色の町に見えた。クスコ近辺の山には、樹木が少なく、遠くに見えるアンデス山脈の6000m級の山々には、雪が沢山あった。クスコの町は、標高約3400mなので、空気は薄くなっているが、大きな声を出さず、ゆっくりと行動して、体を慣らすことによって、高山病には、かからないように配慮した。

クスコは、かつて北はコロンビアから南はチリ北部まで、南北4000kmもの地域を支配していた南米最大の王国、インカ帝国の首都であった。クスコというのは、「へそ」という意味で、インカ帝国を築いた人々にとって、世界の、そして、彼等の宇宙観の中心が、クスコだったのである。クスコという町は、インカ時代の名残りとしてスペインの征服の歴史が混じりあっている古都で、世界遺産に1983年に登録されている。インカ帝国の首都として、クスコが機能し始めたのは、16世紀の前半で、その頃、コリンカチャと呼

ばれる太陽の神殿や、歴代インカ皇帝の宮殿が建てられた。建物は、「カミソリの刃 1 枚通さない」と形容されるインカの精密な石組みによるもので、内部は、黄金像や宝石でまばゆいばかりに飾られていたという。しかし、スペイン人の征服者たちが、1532 年にインカ皇帝を殺害するとインカ帝国は滅亡し、インカの人たちは、クスコから追い出され、山奥へと逃れていった。かわってスペイン人たちは、神殿や宮殿にある金の像を略奪し、それらを金の延べ棒に変えて本国のスペインへ送ったという。クスコには、インカ時代の石組みのある場所が多くあり、両側が石組みの細い通りでは、インカ帝国の皇帝の服装をしている人が立っていたり、インディオ達が行き交う様子は、昔のインカ帝国の時代を思い出させてくれる。

クスコの郊外にあるサクサイワマンの 360m 続く 3 層の巨石を積み上げた要塞跡は、圧巻である。そこで、毎年 6 月 24 日に“太陽の祭りインティ・ライミ”が行われ、世界中から、人々が訪れる。これは、南米三大祭りの一つである。

クスコ郊外で、もう一つ思い出の場所は、タンボ・マチャイ遺跡で、標高 3800m あり、今回の旅で一番高いところにあった。空気がうすいせいか、からだが重く感じられ、タンボ・マチャイ即ち“聖なる泉”に着いた時には、顔が青ざめ、高山病の初めての体験をした。現地の子供たちは走り回っているのに、私たちは、途中休みながら、ゆっくり歩いても、みな高山病のような状態になった。歩いている途中、子供たちが親切にも、強い香りの草を渡してくれ、それをかぐように言ってくれた。高山病対策である。尚、”聖なる泉”は、インカ時代は、沐浴場だったようで、今も、常に同じ量の水が湧き出し、流れている。

ペルーの世界遺産の中で、一番期待していたのが、マチュピチュの遺跡で、“謎の空中都市”とか、“インカの失われた都”とか言われている。マチュピチュは、クスコから 114km の奥深いジャングルの中にあり、標高は、2400m で、クスコよりずっと低いので、2 時間余りの見学は、高山病にも罹らず、無事に終えることができた。マチュピチュ山(老いた峰)とワイナピチュ山(若い峰)とを結ぶ

遺跡の中には、段々畑・水汲み場・陵墓・太陽の神殿・王女の宮殿・神官の館・コンドルの神殿・聖職者・貴族・庶民それぞれの居住区・牢獄・石切り場・広場・日時計・石臼・葬儀の石や墓地など人間が一生送る場が整っている。飛行機やバスや列車を何度も乗り継いでここにやって来たとき、ジャングルの奥地にあるマチュピチュ遺跡の存在自身が奇跡に思えた。このマチュピチュ遺跡の壮大さに、じかに触れることができたことに、感謝したい気持ちにさえしてくれた今回の旅であった。



クスコのカテドラル



マチュピチュ

市民ガイド実施表 (09.05月～07月)								
	2009年5月		2009年6月		2009年7月		09.4～07月累計	
	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数
月	1	15					1	15
火			3	70			3	70
水	2	80					2	80
木	1	6	1	31	1	30	3	67
金	3	61			1	10	4	71
土					1	25	1	25
日	1	15					1	15
計	8	177	4	101	3	65	15	343

新型インフルエンザの影響で5～6月5回キャンセルあり (95名)

県大型観光キャンペーン「あいたい兵庫」期間中のガイド記録 (4～6月)

4月(土日) 計8回 来訪者 9名

5月(土日) 計8回 来訪者 44名 (ほか2日、インフルエンザの為中止)

6月(土日) 計8回 来訪者 50名

有岡城跡から大溝筋跡→三軒寺→旧岡田家酒蔵まで約1.5Hガイド。

市内ガイド新人研修会実施 (市内A～F各コース)

4月28日(火) a m 4月28日(火) p m 6月23日(火) a m

6月30日(火) a m 7月6日(月) a m 7月13日(月) a m

どんぐり座公演記録

5月30日(土) 愛護少年団 (岡田家酒蔵) 「桜物語」

7月27日(月) 高畑ふれあいサロン (有岡センター)

「三軒寺の砂かけ狸」「大鹿の雨乞い」「伊丹に猿がいなくなった話」

歴史ロマン体験学習支援

8月8日(土) 勾玉づくり 9月5日(土) 埴輪づくり成形

10月17日(土) 埴輪づくり野焼き

今後の予定

10月4日(日) ボランティア祭り「パネル展示予定」 市役所周辺

編集後記

パソコングループでの火曜会通信作りも今号で2作目となりますが、皆様から頂いた原稿を慌ただしく編集するため、最終的には先生に負担が掛かってしまいますが、皆で分担し合いながら努力して行きたいと思っております。尚、原稿も字数・大きさがバラバラで、纏めるのに一苦労です。原稿はA4、1枚位で、より多くの方々に投稿して頂く事を期待しています。(K・H)